



クローン・オブ・エイダ

「人が神から与えられたのは、自分で自分を作り直す事だけなのよ」

ティルダ・スウィントン × ティモシー・リアリー × ザ・レジデンツ



監督：リン・ハーシュマン・リーソン 製作：ヘンリー・S.ローゼンタール 撮影：ヒロ・ナリタ

出演：ティルダ・スウィントン、カレン・ブラック、ティモシー・リアリー、フランチェスカ・ファリダニー、ジョン・オキーフ

音楽：ザ・レジデンツ 配給：アップリンク 1997/アメリカ・ドイツ/85分/35mm/カラー/1:1.85 www.uplink.co.jp



これは、ショッキングだが、現実にも未来にあるかもしれないイメージだ。この映画には、私の同僚や友人の研究内容がすでに出てくるからだ。将来、確実にコンピュータは私達の間愛の中に深く介在し、幸福と不幸を呼ぶだろう。

土佐尚子 / メディア・アーティスト、マサチューセッツ工科大学

エイダが特別な存在でありえたのは、彼女が十九世紀末に生きながら二十世紀を予言して生きた、はからずも生きざるをえなかったからであろう。『クローン・オブ・エイダ』は優れて「母と娘」の映画なのである。

山田正紀 / 作家

強い興味を引き起こすストーリーに、短いループと反復を含む繊細な映像。自己催眠の中で見ることの出来たドキュメンタリーのような錯覚を彩る、レジデンツのサウンドトラック。まるで、何も音がしていないような、冷たい手に脳髓を撫でられて安心してるような…。

常磐響 / デザイナー

強い意志が、低く流れるザ・レジデンツの音楽のごとく美しき閉塞感を伴い、脳髓にやってくる。観終わって頭に浮かんだのは夢野久作の『ドグラ・マグラ』と、ムーンライダーズの『物は壊れる人は死ぬ三つ数えて日をつぶれ』でした。

青野賢一 / BEAMS RECORDS ディレクター

『クローン・オブ・エイダ』は、観る人の心を人間のクローンがもたらす可能性の世界へ導く素晴らしい映画です。芸術や科学の領域における優秀な遺伝子を、彼等の記憶や体験と共に時代を超えて生存させ、人類の未来に貢献し続けていく…、それこそまさに、クローンエイド社の希求していることなのです。

ブリジッド・ボアセリエ博士 / クローンエイド社CEO

クローン・オブ・エイダ

DNAが三つの世紀の記憶を繋ぐ——気鋭の女性監督によるアート・サイエンス・ファンタジー

本作品はデジタル・クローンをテーマに、記憶・生命の可能性に挑戦する19世紀ロンドンと現代のサンフランシスコの二人の女性の物語です。監督は、インタラクティブ・アート界で活躍するアメリカ人監督リン・ハーシュマン・リーソン。その才覚で描かれたバーチャルワールドは、ベルリン・トロント・サンダンスなどの国際映画祭で高い評価を得ました。主演に、テレク・ジャーマン監督作品や、『オランダ』『ザ・ビーチ』や『アダプテーション』などで数々の女優賞を受賞しているティルダ・スウィントン。特別出演にサイケデリック・カルチャーの伝導師、故ティモシー・リアリー(本作が最後の映画出演)、音楽に匿名カルトバンド、ザ・レジデンツが参加しています。



[STORY] サンフランシスコで記憶の遺伝学的伝達を研究するエミーは、恩師シムス(ティモシー・リアリー)から受け継いだDNA記憶拡張装置を使い、時空を超えて19世紀のロンドンに生きるエイダ(ティルダ・スウィントン)との交信に成功する。エイダは、かの英国ロマン派詩人バイロン卿の娘であり、人類最初のコンピュータ・プログラマーでもあった。エイダは、結婚後も自由奔放に様々な異性関係を結んでいく一方、3人の子供の子育てと自分の研究を両立することの出来ないジレンマに悩み、次第に賭け事やアヘンにのめり込んでいく。エミーは、エイダに、クローンという技術によって自らの存在を後世に受け継いでいくことを提案するが…

2003年7月、時空を越えたレイトショー

特別鑑賞券1500円(税込)、劇場窓口・都内プレイガイド・チケットぴあにて絶賛発売中
当日料金(税込) 一般/1800円 大・高/1500円 中・小・シニア/1000円

新宿武蔵野館

JR新宿駅中央東口1分 三越裏 武蔵野ビル3F
tel.03-3354-5670 [整理券制]
<http://www.musashino-k.co.jp>

